

# デジタル・アーカイブに見る イギリス女性警察官の表象 — その「参入」から「統合」まで —

杉村使乃

## はじめに

現在、スコットランド・ヤードの呼称で知られるイギリスの首都警察<sup>(1)</sup>のウェブサイトのリクルート欄を開くと<sup>(2)</sup>、イメージを通してジェンダー平等と人種の多様性を強調し、警察官という職業は広く門戸を開いているというメッセージを発信している。ジェンダー平等について言えば、イングランドとウェールズの43警察において、50,364人、全体では34.9%を女性が占め、2020年4月以降の採用においては42.5% (13,326人) に上る<sup>(3)</sup>。2012年のロンドン・オリンピックの警備を指揮したクレシダ・ディック (1960-) が2017年に女性初の — 同性愛者であることも公表している — 警察長官に就任するなど、ジェンダー平等は十分に推進されているように見える。

しかし世界各地の警察組織同様、イギリスにおいても警察は長い期間、「典型的な男性の仕事」と見なされてきた (Mawby 1999, 204)<sup>(4)</sup>。警察組織に関する研究においても、女性警察官については、スーザン・マーティンの研究をきっかけに徐々に発展してきた。そしてジェニファー・ブラウンは、イギリス、アメリカにおける女性警察官の導入を「参入」(entry)、男性とは別の組織として採用された時期を指す「分離制限のある発展」(separate restricted development)、男性の組織との「統合」(integration)、「離陸」(take-off)、「改革」(reform)、マイノリティグループから脱する「乗り越え」(tip-over)の6つの段階に分け、その後の研究の基準となるモデルを提示した。更にそのモデルにイギリスの女性警察官の導入の歴史を照らし合わせた諸段階が示されている (Rabe-Hemp and Garcia 2019, 88-89)。本論では、イギリスの女性警察官導入の過程を概観し、ブラウン・モデルの「参入」、「分離制限のある発展」、「統合」の段階で、「典型的な男性の仕事」に就いた彼女たちが、メディアでどのように表象されたのか、特にその制服姿にどのよう

なまなごしが向けられていたのか、1970年代までのメディア表象を通して考察する。

ブリティッシュ・ニューズペーパー・アーカイブで「女性警察官」(policewoman)を検索してみると、二つの世界大戦を含む20世紀前半に爆発的に増えていることがわかる<sup>(5)</sup>。

期 間	記事点数
1800-1849	8
1850-1899	188
1900-1949	21,815
1950-1999	72,562
2000-2023	865

アーカイブ上に残されている女性警察官関連の記事の中でも、現在も続いている日刊紙『デイリー・ミラー』はロンドンに拠点を置く全国紙であること、また多くの警察官と同じ社会階層を読者層に持つことから、検討に適した媒体である。創刊は1903年11月2日、イギリスで最も古い日刊紙の一つで、タブロイド版で発行されている。タブロイド版というとは現在ではゴシップ紙のイメージが強いかもしれない。1904年には写真やイラストを多用した紙面作りで、創刊時の38,540部から12万部へと発行部数を伸ばした。発行元は後にノースクリフ卿と呼ばれるアルフレッド・ハームズワースで、1896年5月3日創刊の『デイリー・メール』(Daily Mail 1896-2016)ですでに成功を収めていた。高級紙と大衆紙の中間「ミドル・マーケット」と呼ばれる『デイリー・メール』と比べ、『デイリー・ミラー』は1930～1940年代には労働者階級を読者層に持つ左翼的な新聞へ転換する。1944年には労働党を支持する紙面を展開し、1945年の総選挙で労働党が政権を獲得することを考えると、影響力のあるメディアと言える<sup>(6)</sup>。

またここでは女性警察官の「参入」、「分離制限のある発展」の段階を考えるため、写真週刊誌『ピクチャー・ポスト』(Picture Post: Hulton's National Weekly 1938-1957)の女性警察官を取り上げた記事も参照する。『ピクチャー・ポスト』は創刊号においては75万部、出版開始から4ヶ月後には毎週135万部を販売し、特に第二次世界大戦時において、影響力のあった大衆メディアであった<sup>(7)</sup>。本論では『デイリー・ミラー』、『ピクチャー・ポスト』掲載の記事の中でも、特に制服姿の女性警察官の写真に掲載した記事を主に取り上げ、ブラウン・モデルの「参入」、「分離制限のある発展」、「統合」に照らし合わせて考察する。時代は第一次世界大戦時から1970年代に該当する。

ブラウン・モデルの第一段階「参入」を特徴づけるのは、男性中心的な職場に女性を導入するきっかけとなる政治的、社会的、経済的な危機である (Rabe-Hemp and Garcia

2019, 13)。第一次世界大戦勃発に伴い、一人でも多くの男性を戦場へ送るために急激な労働力不足が起こった。そして女性警察官は、女性や子どもが関わる犯罪を処理する上で重宝されるようになった。女性警察官が身につける制服には、彼女たちが警察という法の執行に携わる力を持つことを示すだけでなく、男性たちの制服とは違った意味も付与されていた。1930年代までにはミュージカルなどの舞台芸術や映画においても、制服姿の女性たちが登場するようになり、彼女たちの制服は職業を示す以上の意味合いを持っていた。警察や軍の補助部隊で働く女性たちの軍服的な制服は、彼女たちのプレゼンスがもはや無視できない規模に広がっていることを示す一方、「女らしさ」からの逸脱や、女性の身体に男性的な衣服というコンビネーションが生み出す両性具有的なセクシュアリティや倒錯したエロティシズムを示唆するようになっていた (Craik 2005, 91)。ここで取り上げるメディアにおいても、女性警察官の制服姿には好奇の目が向けられていた。ブラウン・モデルでは、第4段階「離陸」の段階——機会均等の強制執行が進む——において、男性の抵抗は非公式なセクシュアル・ハラスメント、男性優位の警察文化による抵抗として現れると考えられている。そして1995年の最初の女性警察本部長就任が「離陸」を象徴する出来事としているが (Rabe-Hemp and Garcia 2019, 89)、男性優位の文化による抵抗は戦後に進められた「統合」の段階から、すでにメディアには現れていたと言えるだろう。

## 1. 総力戦と女性警察官の「参入」

イギリスの近代警察は1829年に首都圏で誕生し、その後、範囲を拡大したが、19世紀に女性が警察官として公認されることはなかった。しかし、犯罪を犯した女性と子供の監視のため「ポリス・マトロン」(Police Matron)として警察官の妻など14人が採用されている。それでも、罪人たちの言葉遣いや、泥酔状態、暴力が女性たちの「品位」(respectability)を脅かすものとしてこのような職場に女性を送ることは非難された (林田 2009, 26)<sup>(8)</sup>。

イギリスの女性警察官導入の歴史について、林田敏子は以下の2点を大きな理由として挙げている。一つは男性労働力の不足である。第一次世界大戦勃発と共に警察業務に従事していた男性の2割程度が兵士に志願、あるいは他職種へ流失した。そのため、治安の悪化が進む中、人手不足が深刻化する。また、女性を警察官として登用しなければならない事態も生まれた。それが、女性のモラル管理という問題である。林田によると第一次世界大戦時には軍服の兵士たちを追いかける「まったく新しいタイプの少女」が登場した (林田 2013, 82)。こうした若い女性たちの「カーキ・フィーバー」による性モラルの乱れ、女性の喫煙・飲酒が問題となり、女性警察官はこうした女性にアプローチし、指導するこ

とが期待された。

この「参入」の段階におけるキーパーソンは、ソフィア・アン・スタンリー（1873-1953）、マーガレット・ディマー・ドーソン（1873-1920）、そしてドーソンの協力者であったメアリ・アレン（1878-1964）である。ドーソンとスタンリーは異なる女性パトロール隊を組織したが、そのあり方は、女性警察官の黎明期における「女らしさ」との葛藤を示している。公的な認可は与えられなかったが、女性警察ヴォランティアーズ（Women Police Volunteers 以下 WPV 1914-1919）と、ヴォランタリ女性パトロール隊（Voluntary Women Patrols 以下 VWP 1914-1919）は女性初の警察組織として考えられている。前者は、女性参政権運動に関わっていたニーナ・ボイル（1865-1943）と上流階級出身のドーソンによって立ち上げられ、プロとして女性が警察業務に従事する機会を探り、女性の職業開拓と永続的な雇用を模索していた。しかし、第一次大戦時に施行された夜8時から翌朝7時までの外出禁止令を含む国土防衛法に関して、ボイルとドーソンは袂を分かつことになる。前述したように、女性パトロール隊に期待された任務は、若い女性の性モラルの監視で、その目的は軍隊の男性を性病から守ることであった。ボイルはこの法律を男性側だけを守り、女性を罰するための手段と考え、女性が自分たちの社会進出のために、同胞の自由を制限し、統制することは許されない、と1915年1月に内務省に抗議する。一方、ドーソンはこの法律は無防備な女性を保護するものと主張した。その背後には、理念の部分で多少の妥協をしても、公的な認可を取り付け、女性の職業を確保したい、という考えがあった。WPVは分裂し、ドーソン、そして戦闘的な女性参政権運動を展開した女性社会政治同盟<sup>(9)</sup>のミリタントとして活動していたメアリ・アレンによって「女性警察サービス」（Women Police Service 以下 WPS）として活動を継続する。ロンドンの女性警察特別訓練学校で訓練を受け、1921年まで採用された1,231人中985人は兵器工場のパトロール隊員として軍需省に雇用され、他は各地の警察や民間工場にて活動した。少額ではあるが有給のため、労働者階級の女性の応募もあったが、実際には中流階級以上の採用が上回っていたらしい。後述するVWPと大きく違うのは、警察のシンボルカラーである青のチュニックとロングスカートという制服を着用していた点である<sup>(10)</sup>。制服には組織のイニシャルや肩章のような軍隊的な要素も取り入れられていた。

一目でそれとわかる制服を身につけ街に現れた女性警察官を、激しい参政権運動を展開していた「サフラジェット」と「警官（copper）」を合わせた造語、「コペレッツ（copperetts）」と呼ぶものもいた（林田2013, 78）。彼女たちの第一の任務は、公園、パブ、遊戯施設、宿泊施設の周辺のパトロールで、国土防衛法違反を摘発するため、男性警察官が立ち入れない女性の日常や私生活に干渉することもあった。当時、男性警察官が有する逮捕権は女性たちには許可されていなかったが、軍隊を「墮落した女性」から保護するため

に、一定の警察権を認められることもあった<sup>(11)</sup>。女性パトロール隊の行動が地元警察の管轄下を結果的に侵害したとしても、戦時という限られた期間においては黙認されていた(林田 2009, 30)。しかし、同胞を「売春婦扱い」するそのパトロールのあり方は批判の対象になることもあった(林田 2013, 86-88)。

ドーソンやアレンのリーダーシップが「プロ意識と自立」として評価される一方、もう一方の女性パトロール隊 VWP を率いたスタンリーは「従属的で女らしい」と形容される(Rabe-Hemp and Garcia 2019, 89)。VWP は無償のパートタイムで働く 4、5 千ものパトロールを大英帝国内に派遣した。制服は着用せず、私服に組織の腕章をつけていた。ドーソンやアレンたちが雇用の獲得に熱心だった一方、VWP は博愛主義的な団体で、雇用を目指すものではなかった。その活動は、階級的に目上の女性たちによる、若い女性への指導的役割という側面が強かった。

## 2. 女性警察官の「女らしさ」——「分離制限のある発展」

ブラウン・モデルに示されたように、警察のような男性中心的な組織において、女性が「参入」する段階では、男性たちはその変化に対して、女性の仕事を補助的なものに限ることによって、更なる参入に抵抗する。女性パトロールの中には権限を逸脱したかのように見えるものもいたが、基本的には「おんな・子ども」を指導する任務に限られていた。

イギリスの女性警察官の歴史における次の発展段階を記すのは、1918 年 12 月、首都警察が公的に認可した女性パトロール隊 (Metropolitan Police Women Patrols 以下 MPWP) を結成した時のことである。この段階は、男性と異なる役割に意識的に就くことで、警察組織内での役割を拡大し、発展を遂げることで特徴づけられる。つまり、女性警察官自身が、女性の業務として与えられた個別の地位を持つマイノリティ・グループとして、男性優位の分野で自分たちの地位を確保したのである (Rabe-Hemp and Garcia 2019, 14)。

女性警察官の「参入」の段階で活躍した二つの組織、WPS と VWP はここに人材を派遣するが、興味深いのは初代のパトロール隊長に選ばれたのは、第一次世界大戦時、厳しく「不埒な」女性たちの検挙にあたった WPS ではなく、博愛主義的団体のスタンリーであったことである。陸軍出身の首都警察長官ネヴィル・マクレディ (1862-1946) は、首都警察に女性部隊を編成する際、軍服のような制服を身につけ、男性同様の逮捕権の行使を要求するドーソンやアレンではなく、より「女らしい」スタンリーを選んだ (Rabe-Hemp and Garcia 2019, 90)<sup>(12)</sup>。

MPWP は WPS のように有償・フルタイムの職業で制服着用が認められている。しかし雇用を永続的なものにする恐れのある宣誓は認められなかった。逮捕権はなく<sup>(13)</sup>、1 年

雇用契約で、年金受給権はない。それまで同様、女性や子どもが絡む事件の対応にあたった。戦時下では、時にはかなり踏み込んだ捜査や逮捕権を容認される者もいたが、MPWPでは、より権限が縮小された。当初、MPWPは合計112名（警視1名、警視補1名、巡査部長10名、巡査100名）が採用された。通常、2人組でロンドン市内をパトロールするが、数メートル後に制服の男性警察が付き添い、彼らの監視・保護のもと、任務にあたるという体制をとっていた。

1919年、性差別廃止法が通過し、公務員として採用される機会が女性にも初めて与えられ、法律上は未婚・既婚によって就職の差別はされない、という前提ができた。女性の採用については、首都警察、地方警察それぞれの裁量に任されたが<sup>(14)</sup>、女性警察官の採用については、たびたび検討が重ねられた。1920年2月の委員会では、戦時に活躍した女性警察官を平時においても雇用すべきかどうか検討され、かつては男性に限られていた警察任務に女性が参入することが公に認められる<sup>(15)</sup>。しかし人員不足の都市部と違い、地方警察では採用に抵抗があった。また採用の場合も、能力と資質の面において男女の間には決定的な違いがある、という委員会の前提は覆されることはなかった（林田2009, 32）。1921年8月には戦間期の不況の中、大幅な公共支出削減が協議されMPWPの解体が提言された<sup>(16)</sup>。これに対し女性団体や女性初の庶民院議員のナンシー・アスター（1879-1964, 国会議員1919-1945）も抵抗したが、112人の人員は24人に削減された。

戦間期のMPWPは自他ともに女性性を強調することで、キャリアの礎をなんとか確保していた<sup>(17)</sup>。『ピクチャー・ポスト』1939年7月22日号は、導入から20年を経て、ロンドンの風景の一部となった女性警察官を特集している。「…の生活」（The life of …）という切り口はこの雑誌が繰り返し使っており、当時、目にするようになった新しい女性たち



「女性警察官の生活」身なりへの気遣い『ピクチャー・ポスト』  
1939年7月22日号

— ショーガール、映画のエキストラ、女子大学生 — の一日を写真で伝える。通りで見かけるようになった気になる女性の存在にフォーカスした記事と言えるだろう。乱暴な男性から身を守る護身術の訓練は好奇の目を持って伝えられる一方、彼女たちが女性 (stranded [墮落した]、と形容される) や子どものトラブルに対応していることが写真入りで語られる。身なりへの気遣いをする様子を挟むのは、この雑誌が軍隊の女性補助部隊の様子を伝える記事と共通している<sup>(18)</sup>。男性の仕事であった警察業務を担う女性たちにあえて「女らしさ」を補完することは、彼女たちの新しい職業に対する批判を和らげるだけでなく、読者に「女らしさ」に反する仕事ではないと伝え、その後のリクルートへの悪影響を避ける効果もあったであろう。

### 3. 「女性警察官はもっと必要か？」— 総力戦と女性警察官

度重なる抵抗に遭いつつも、再び女性警官の登用を推進するきっかけになったのは、またもや戦争であった。1939年8月、18～25歳の女性を対象にした警察女性補助部隊 (Women's Auxiliary Police Corps) が結成される。第二次世界大戦時に結成された軍隊の女性補助部隊同様、当初は、運転、自動車の整備、事務、電話対応、簡易食堂運営など、限られた業務であったが、戦争の長期化と労働力不足により、後に警察業務全般に拡大される。

1941年12月の国家総動員法により、1942～1945年は女性の戦時貢献への動員も増加する。それに伴い、女性を対象とした警察活動の必要性も高まった。軍需工場や軍隊の女性補助部隊で働くことにより、若い女性たちは行動範囲を拡大したが、喫煙や飲酒、酒場や娯楽場に入出入りする、といった男性ならば許される行動も、女性においては問題視され、第一次世界大戦時同様、女性の性モラルの墮落が懸念された。こうした逸脱した女性たちを監視する女性警察官のニーズは高まり、軍隊の女性補助部隊からリクルートされることもあった。特に1944年6月6日ノルマンディー上陸作戦前後には、英米兵士のキャンプ周辺で活躍することが期待された。1943年、イギリス駐在のアメリカ軍で性病が蔓延していると報告があり、アメリカ軍性病統制の処置が取られる。“good-time girls” や “patriotutes” と呼ばれた「不適切」な女性の性モラルの管理に関心が集まった (Gardiner 1992, 125)<sup>(19)</sup>。

女性警官増員が繰り返される状況に対し『ピクチャー・ポスト』は1942年10月7日号で「女性警察官はもっと必要か？」という記事を掲載している。女性警察官のニーズの理由— 軍隊キャンプ周辺のスキャンダル — は詳らかににはされないが、女性警察官の増員に世間が必ずしも肯定的ではなかった様子が窺われる。しかし、女性警察官を必要とする

状況は、ヨーロッパ戦線終結が近づく時期まで続き、『デイリー・ミラー』1945年4月5日号は「国内の軍事施設にあまりにも多くの兵士たちが収容されたことに伴う問題に対応するため、もっと多くの女性警察官を登用することが急務である」と伝えている。これまでの傾向と同様、若い女性という被写体が暴漢との格闘という行為のギャップが写真でもコミカルに伝えられ、女性警察官の外見について触れるところも特徴的である。彼女たちは「女の子」(girl)と呼ばれ、未熟さと彼女たちの持つ性的魅力が仄めかされている点も共通している<sup>(20)</sup>。

一方、女性警察官に対するネガティブなイメージも伝えられている。『ピクチャー・ポスト』1945年4月21日号の読者欄には、女性補助部隊に勤める自分の恋人に、同じく女性補助部隊で採用された女性警察官がしつこく付き纏い、不快な思いをさせられたという男性読者の手紙が寄せられている<sup>(22)</sup>。女性警察官増員は、戦後の警察業務がどのように配分されるのかという懸念にも繋がり、『デイリー・ミラー』は、「憲兵の女の子は、戦後の警察職を手にいれる」と、警察組織への女性の更なる参入に対し、疑問を呈している<sup>(23)</sup>。

#### 4. 「統合」への道のりとメディア表象に見る「抵抗」

細分化していた地方警察の統合が戦後に進められるが、1960年、第一波統廃合が終了した時点でも125の地方警察が存在し、更なる統廃合が進められる。ジェンダー平等については、1946年に首都警察はマリッジ・バーを撤廃するが実際には結婚をきっかけに退職する女性も多く、1972年まで女性部署は継続し、ブラウン・モデルの「分離」段階は継続した。一方、『デイリー・ミラー』には、祖父、父、娘の3代に渡って警察官となった女性の記事が掲載され<sup>(24)</sup>、若い女性向けのキャリア雑誌の広告には「女性警察官」という項目が設けられていることから、女性警察官が若い女性のキャリアとして、定着しつつあったことが窺われる<sup>(25)</sup>。

週刊誌と日刊新聞という違いはあるが、戦後の『ピクチャー・ポスト』は女性警察官について大きく扱うことはなかった。一方『デイリー・ミラー』は制服姿の女性警察官の写



「きれいな警察官」警察官としての訓練を受ける女性空軍補助部隊『デイリー・ミラー』1942年1月17日号



真を掲載した記事を比較的多く掲載している。しかし、その扱い方には、女性警察官の「統合」への過程に対する文化的な抵抗と解釈できるものも少なくない。女性警察官に関する記事は、個々の事件に関する記事を除けば、彼女たちの「お手柄」が女性であることに触れられず伝えられることはない。また、彼女たちの外見、「女らしさ」、男性警察官に比べて、その任務が補助的なものであることが繰り返し伝えられた。例えば、『デイリー・ミラー』1953年8月19日号掲載の記事では、元速記タイピストのブルネットの美人 (glamour)、マリー・ファーンエスが、警察音楽隊で「クルーナー・ボイス」を発揮するために採用された、と伝えられている<sup>(26)</sup>。また1956年11月21号では、信号無視を検挙したパトリシア・フォッグが、女性警察官にしては小柄で、犯人は警察官だと思わなかった、と伝えている<sup>(27)</sup>。戦時中も戦後も、通りをうろつく若い女性の検挙は、女性警察官のもっとも重要な任務であった。前述した『ピクチャー・ポスト』の読者欄にもあったように、若い女性を取り締まるという彼女たちの任務は、女性警察官に否定的なイメージを与えてしまったかもしれない。1967年3月4日号には、制服姿で足を組んだ笑顔の女性警察官ジーン・パーヴィスが、警察官のバッジのせいで恋愛のチャンスを逃している、と嘆き、写真で見るとからは十分、魅力的な若い女性が、あたかも警察という職業により、恋愛の対象から外されているかのように表象されている<sup>(28)</sup>。

## 5. 『デイリー・ミラー』に見る制服の表象

戦後、女性警察官の制服は目まぐるしい刷新を遂げる。ルイズ・A・ジャクソンは「分離」の段階において、女性警察官の制服は「女らしさ」を強調する——スカート丈は短くなり、体のくびれや丸みを強調する——傾向にあり、性差を強調することによって、自分たちの地位を確固としたものにした、と述べている。(Jackson 2002, 65) 実際、『デイリー・ミラー』も女性警察官の制服姿の変化に関心を持ち、そこに現れる「女らしさ」を伝えることに余念がない。

1945年9月20日「きれいな警察官をつくる」では、首都警察女性警察官の制服が堅苦しくて時代遅れであること、内務大臣ジェイムズ・シューター・イーデが刷新を計画していることが伝えられる<sup>(29)</sup>。現場の女性警察官は制服の刷新よりもむしろ業務の拡大や昇進に関心があったかもしれないが、『デイリー・ミラー』は彼女たちの「女らしい」関心を強調する。

特に大きなニュースとして伝えられたのは、王室御用達デザイナー、エリザベス二世の成婚や戴冠式にも関わったノーマン・ハートネル (1901-1979) がデザインしたものであろう。1967年9月15日号の『デイリー・ミラー』掲載の「巡回中の女性警察官をフラン

ス風に」(“Genderme Look for Police Girls On the Beat”)では、フランス風のキャップと上着の新制服でスコットランドヤードに現れた女性巡査(W. P. C. Dilys Puddephot)を写真入りで紹介している。警視正のシャーリー・ベック夫人によると、どんな体型にも合う「権威ある優雅さ」を体現した制服とのこと。シーム入りの黒ストッキングは変わらない女性警察官の必須アイテムで、黒のローヒール、肩かけハンドバッグが1セットで一着30ポンド、とかなり高価である<sup>(30)</sup>。1960~70年代に一世風靡したマリー・クワントのミニ・スカートには遠く及ばずとも、従来のものよりかなりスカート丈は短くなっている。ロバート・マーク首都警察長官は、制服そのものだけでなく、このニュースによって、女性警察官という仕事が世間に知れ渡り、ルクルート面でもいい効果をもたらすことを評価している<sup>(31)</sup>。一方、実際に着用する女性警察官の評価は必ずしも高くない。スカートはプリーツがないため動きにくく、動くとき上に上がってくる。またおしゃれな帽子は男性のヘルメットと異なり保護効果はない。上着のポケットは使えず、ケープは冬寒いなど<sup>(32)</sup>、実用向きではなかったせいか5年で変更を余儀なくされた。

ストッキングとハンドバッグは女性警察官が身につけるアイテムの中でも、「女らしさ」を感じさせるもののようだ。『デイリーミラー』は、職場で支給されるストッキングの質に対する女性警察官の不満や、またボーナスとしてどのくらいストッキングが支給されるか、繰り返し取り上げている。女性警察官の不満を汲み取るというよりも、1950年代初頭まで配給が続いた厳しい経済状況で、女性のストッキングに公的資金を使うことの是非に読者の目を誘導しているのかもしれない<sup>(33)</sup>。

防寒や動きやすさのためにズボンを履けないことに多くの女性警察官が不満を持っていたにもかかわらず、長い間、その希望が叶えられることはなかった。女性警察官にスカートを履かせるという目に見えない意志はそれほど強いものだった。それでも任務の内容が拡大するにつれて、制服も変化を



「巡回中の女性警察官をフランス風に」『デイリー・ミラー』1967年9月15日号

余儀なくされた。『デイリー・ミラー』1960年3月7日号には首都警察が女性警察官にもバイクの使用を認め、それに伴いキュロットスカート (divided skirt) を制服に取り入れた、とある<sup>(34)</sup>。1970年6月17日号にはズボンを履いて馬でパトロールをする女性警察官の写真が掲載されるが<sup>(35)</sup>、正式にズボンが制服に取り入れられたのは首都警察では1976年だった。しかし裁判所や内勤ではスカート着用が変わらず求められた。1977年12月7日号では新しく採用されたズボンの制服とスカートの制服が並べて紹介されている<sup>(36)</sup>。制服の変化は、女性警察官の業務の変化を示すものである一方、彼女たちの「女らしさ」を殊更に強調する「水玉模様のブラウス」や夏用ブラウスからのぞく「胸の谷間」についても『デイリー・ミラー』はすかさず報道している<sup>(37)</sup>。

## 6. 男女共同参画と「非公式の抵抗」

1967～1968年にかけて、警察官募集のための印象的な広告が『デイリー・ミラー』に掲載される。「バーバラとマイクは1つのチーム、その仕事は人々を助けること」というキャッチコピーは、男女共同参画の姿勢をアピールしている。年齢は男女とも応募時19～35歳とあるが、女性は「多くは20歳」と但し書きがある。新しい賃金体系の下、支払われる給与は、年収、男性 £765 (19歳)～£870 (22歳以上)、女性 £690 (19歳)～£785 (22歳以上)で、他に住居手当が付くとある。身体的な条件として、男性は身長172.7 cm以上、女性は162.6 cm以上である<sup>(38)</sup>。

1970年代は、女性警察官の待遇に大きな変化があった<sup>(39)</sup>。1970年には同一賃金法が通過し、1971年3月6日 ロンドンでのウーマンリブの行進に4,000人の女性が参加し、1973年、それまで分離していた女性警察は首都警察に統合され、男女別になっていた昇

**Barbara and Mike are part of a team whose job is helping people**

Barbara Penton and Mike Saunders found the Metropolitan Police for much the same reason. Barbara, a 20-year-old married woman from London in Fulham, Lambeth, fell in love by her job in a factory. Mike, a 20-year-old laboratory assistant from Kewton Park, near Sheffield, wanted to be out and about far more than laboratory work allowed him to be. Now they're part of a team that works with people, helping them and sharing their problems.

Together they handle every kind of police work - no two days are ever alike for them. Their work's not easy but they find it rewarding and exciting.

**And now more money**  
Under a new pay rate, today's policemen and policewomen now get more money. The new starting salaries are:

Men: £700 at 19  
£750 at 22 or over  
Women: £690 at 19  
£740 at 22 or over

In London the rates are higher. You also get four weeks' of a generous pay-for-leave allowance and there are excellent chances of promotion.

**Join the team now**  
Men can apply if they are 17 or over, and between 19 and 35. Women must be 17 or over, between 19 and 35 (although the normal age is 20). Many forces accept applicants at 17. Good health and eyesight is essential. Men who wear glasses or contact lenses or have certain conditions themselves are eligible to join the Metropolitan Police. Fill in the coupon for details.

To: Police Careers Office, Dept. 2188, Bank House, London, E.C.2  
Please send me the booklet "Your career in Britain's Modern Police"  
"The Police as a Career for Women"

Name Mr. Mrs. Miss\* \_\_\_\_\_  
Address \_\_\_\_\_  
Age \_\_\_\_\_

**JOIN BRITAIN'S MODERN POLICE**

男女共同参画をアピールする警察官募集の広告  
(『デイリー・ミラー』1967～68年)

進の制度も撤廃される。そして1975年には妊娠を理由にした解雇は法的に認められなくなる。1975年9月の機会均等政策後の採用では、幹部クラスへの登用が活発になる。

ブラウン・モデルでは、第4段階「離陸」の段階において、女性警察官の更なる参入と男性部署との統合が進められる中、男性の抵抗は非公式なセクシュアル・ハラスメントや男性優位の警察文化に表れる、としている。この段階は、イギリスにおいては1995年ポーリン・クレアが女性初の警察本部長に就任したことが「離陸」段階を示すイベントとされている (Rabe-Hemp and Garcia 2019, 89)。この段階において、機会均等法は強制的に施行され、勇気ある女性警察官による自分たちへの不当な扱いについての訴訟が先例を積み重ねていた。もはや「正当に」抵抗することは難しいため、男性優位の警察文化による抵抗は「非公式」なものになり、セクシャル・ハラスメントの形をとることもある (Rabe-Hemp and Garcia 2019, 89)。

すでに元女性警察官によって、彼女たちが受けてきた様々なハラスメントが明らかになっているが<sup>(40)</sup>、「統合」の過程からすでにこうしたハラスメントは頻発しており、メディアもまたハラスメントを容認する土壌を提供していたのではないだろうか。1972年、『デイリー・ミラー』は同一労働・同一賃金について以下のように書いている。

警察の女の子たちが、少しばかり「ウーマン・リブ」の勝利を首都警察にもたらした。彼女たちのボスは、男性の同僚同様の同一労働、同一昇進を認めた。これは、650人の女性警察官が、もはや、迷子の面倒を見たり、家出娘を探したりするだけの存在と見なされないことを示す…女性警察官はすでに1974年までには同一賃金を勝ち取ることになっている。今でも男性の賃金の95%を稼ぐに至っている。(『デイリー・ミラー』1972年6月12日号)

『デイリー・ミラー』はこの記事のレイアウトによって、女性警察官への皮肉な態度を明らかにしている。この記事は、このページで大きなスペースをとり、強いインパクトを与えるヌード写真の隣にレイアウトされている。こうしたレイアウトは1970年代の女性警察官関連の記事に顕著に見られる<sup>(41)</sup>。いずれも、大判のヌード写真の隣に女性警察官の記事をレイアウトすることによって、女性警察官を性的な対象とみなすよう読者の混乱を招く。こうしたメディアのあり方がセクシュアル・ハラスメントを容認する文化の一端を担っている。

## まとめ

本論では、「典型的な男性の仕事」であった警察に女性たちがどのように「参入」し、男性とは別の組織として「分離制限のある発展」を遂げ、全体の組織へと「統合」されていったのか、イギリスの場合についてその歴史を概観した。皮肉にも二つの総力戦は女性警察官導入の大きな契機になるが、その職務は「おんな・子ども」対応、「補助的」な位置付けに制限されていたため、都合よく排除される対象にもなりかねなかった。また、軍隊の駐屯によって起こる性モラルの危機管理について、女性が女性を監視するという事態も生まれていた。イギリスの警察では、女性警察官は男性とは異なる組織に属し、そうすることによって戦後の雇用を確保したが、それは女性の仕事を「補助的な」なものに固定化する一面もあった。

1960～70年代において、ジェンダー平等が法的に推進されるようになるが、デジタル・アーカイブで当時のメディアを紐解くと、女性警察官とその特徴的な制服姿の「女らしさ」がことあるごとに強調されていることに気づく。女性警察官の「参入」から、『デイリー・メール』のようなメディアは警察官としての資質だけでなく、その「女らしさ」に注目し、その「参入」を拒む抵抗を支える文化を担ったと言えるだろう。

## 注

本研究は JSPS 科研費 18K1190（研究課題名「総力戦下の『制服美女』と戦後のキャリア形成の表象とその継続性及び国際比較」）の助成を受けたものである。なお、この共同研究ではイギリス、アメリカ、そして日本における女性警察官が新聞や雑誌、映画などの大衆メディアでどのように表象されているか、国際比較を行なっている。本論は 2023 年パークシャー女性史学会での口頭発表をもとに、大幅に加筆したものである。

- (1) Metropolitan Police はロンドン警視庁とも呼ばれるが、本論では首都警察と示す。また一般的な呼び方に倣い、The United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland を本論ではイギリスと示す。
- (2) 首都警察ウェブサイト “Join us on our mission to make life safer for over 9 million Londoners” (<https://www.met.police.uk/car/careers/9/12/2023> 閲覧)
- (3) イギリス内務省の 2022 年 10 月 26 日発表による。“Over 50,000 female police officers now in forces” (<https://www.gov.uk/government/news/over-50000-female-police-officers-now-in-forces> 9/12/2023 閲覧)
- (4) Chapter 12 “Policewomen: An International Comparison” by J. Brown, A. Hazenberg and C. Ormiston による。
- (5) The British Newspaper Archive (<https://www.britishnewspaperarchive.co.uk/> 9/10/2023 閲覧)。なお「女性警察官」の検索ワードについては “policewoman” を用いた。現在、「婦人警官」、「看護婦」、「保母」など、職業と特定の性別を結びつけるような呼称は日本でも避け

- られる傾向にあるが、本論が扱う期間においては“policewoman”と一般的に呼ばれており、ジョーン・ロックやジェニファー・リーズなどの体験に基づく書籍においても、そのように呼称されている。少なくとも本論で扱う1970年代においては、女性警察官が“officer”と呼ばれることは稀であったと考えられる。また“policewomen”という複数形を使った検索でも、類似した増減の傾向が見られた。
- (6) 『デイリー・ミラー』についてはウェブサイト“Historic Newspapers”より“Newspaper History: A History of the *Daily Mirror*” (<https://www.historic-newspapers.co.uk/blog/daily-mirror-history/> 9/12/2023 閲覧) を参照。また記事はThe British Newspaper Archive から引用する。The British Newspaper Archive 内の『デイリー・ミラー』の“policewoman”関連は全体で記事105点、写真・図版入り137点、広告1点である。
- (7) 写真週刊誌『ピクチャー・ポスト』については *Picture Post* Historical Archive 1938-1957 (<https://www.gale.com/jp/c/picture-post-historical-archive>) を閲覧。この雑誌の詳細については、拙著『制服ガールの総力戦』第二部第二章を参照されたい。
- (8) 女性警察官の歴史については、林田敏子 2002年、2009年、2012年、2013年の他、吉川経夫、今野耿介、“Met Police Female Police Officers history” PFOA (<https://www.pfoa.co.uk/met-police-female-police-officers-history>)、“Women in Policing History” BAWP (<https://www.bawp.org/women-in-policing-history/>)、“Timeline of Female Police Officers within the United Kingdom” Old Police Cells Museum. (<https://www.oldpolicecellsmuseum.com/>)、“Women Policing London 1914-2021” Metropolitan Women Police Association. (<https://www.metwpa.org.uk/history-of-women-police-officers.html>)、“Women in the Police Service, 1914-1918” “Women Police Patrols at Work, London” Imperial War. Museum (<https://www.iwm.org.uk/>) などを参照。
- (9) Women’s Social and Political Union: WSPU。エメリン・パンクハースト (1858-1928)、クリスタベル・パンクハースト (1880-1958) を中心とした女性参政権運動組織。過激な活動により、逮捕・投獄されるものもいた。
- (10) イギリス警察は 軍隊のシンボル・カラーであった赤ではなく青を選ぶことによって、暴徒鎮圧に出勤し、市民に発砲した軍隊とは違うイメージを打ち出そうとしていた (内藤 255)。
- (11) 1914年11月27日 WPS メアリ・アレン、エレン・ハーバーンは、5千人の兵士が駐留するリンカンシアのグランタムキャンプ周辺の女性の保護、モラル維持に従事するため市議会の直接契約していた。「ヴォランティアとオフィシャルのはざま」という一定の警察権が行使されていたと林田は指摘している (林田 2009, 28)。イーディス・スミス (Edith Smith 1876-1923) は逮捕権を行使した初期の女性警察官として記憶されている。
- (12) ローラ・ドーンは、男性同様に逮捕権を行使するだけでなく、ドーンとアレンがレズビアンであることもマクレディが認め難いところであったのではないかと推測している (Doan 2001, 44)。
- (13) 内務省は身体能力が劣ることを理由に女性に宣誓をさせないよう各警察に圧力をかけたという (林田 2009, 32)。
- (14) 採用は各警察に任されていたため、サセックス採用のグラディス・モス (Gladys Moss) のように1919年に採用され57歳まで勤務した女性もいた。彼女はまたサセックス最初のバイクに乗った女性警察官でもある。
- (15) ジョン・ベアード (John Baird) が議長を務めた委員会にて。
- (16) エリック・ゲデス (Eric Geddes 1875-1937 実業家、保守党、海軍大臣 1917-1919 運輸省長

- 官 1919-1921) を長とする委員会で、「ゲデスの斧」と呼ばれる大幅な歳出削減案を提出した。またロイド・ジョージ内閣で内務大臣 (1919-1922) を務めた自由党議員エドワード・ショート (Sir Edward Shortt 1862-1935) は女性警察に批判的な立場を明らかにした。
- (17) アレン自身、1925 年出版の自伝にて「女性むきの任務」を容認し、性別役割分担への疑問を持っていなかったことを露呈している。結果的に「高い身体能力を要する任務」への女性の「不適格性」も強調することになった (林田 2009, 33)。
- (18) 第二次世界大戦時の軍隊の女性補助部隊の表象については、拙著『制服ガールの総力戦』第二部を参照されたい。
- (19) 「愛国者」(patriot) と「娼婦」(prostitute) を合わせた造語。第一次世界大戦にみられた「カーキ・フィーバー」のような現象が、イギリス滞在のアメリカ兵士たちに対するイギリスの若い女性たちにもみられた。この語には、窮地にあるイギリス軍を救うためにアメリカ兵士に進んで身を差し出すのか、とイギリス女性たちに対する皮肉な見方が表れている。
- (20) 「軍は警察任務に就く人員を提供する」(“Forces may loan civil police duty”『デイリー・ミラー』1945 年 4 月 5 日号)
- (21) 第二次世界大戦中の軍の女性補助部隊から女性警察官をリクルートすることについては以下の記事で伝えられている。  
 「空軍は、何人かの女の子を女性警察官に登用」(“The R. A. F. Choose Some Girls to Be Police Women”『ピクチャー・ポスト』1942 年 10 月号)  
 「女性警察官はもっと必要か？」(“Do We Need More Police Women?”『ピクチャー・ポスト』1942 年 10 月 7 日号)  
 「きれいな警察官」(“A Fair Cop-Per: WAAF trained as policewoman”『デイリー・ミラー』1942 年 1 月 17 日)
- (22) 「女、恐ろしき管理統制、更なる警笛」(“Women, Monstrous Regimentation of: Further Blast”『ピクチャー・ポスト』1945 年 4 月 21 日号 読者欄)
- (23) 「憲兵の女の子は、戦後の警察職を手に入れる」(“Girl ‘Red-Caps’ Win Stripes as Cops Back in Civvy-St.”『デイリー・ミラー』1945 年 6 月 24 日号)
- (24) 「『血筋だね』ローズマリー・ミラーは父も祖父も警察官」(“It’s in the Blood” Rosemary Miller whose father and grandfather are police officers. (『デイリー・ミラー』1949 年 4 月 12 日号)
- (25) 「あなたの憧れの職業は？」(“Which of These is Your Pet Subject” 雑誌 *The School of Careers* の広告 (『ピクチャー・ポスト』1953 年 1 月 10 日号掲載)
- (26) 「警察は彼女を採用 — 歌うために」(“Police Take Her In — To Sing Glamour has joined city’s police band”『デイリー・ミラー』1953 年 8 月 19 日号)
- (27) 「信号無視した男を捕まえた小柄な女性警察官」(“P. C. Pat cops jay-walker No. 1”『デイリー・ミラー』1956 年 11 月 21 日号) 身長は 5 ft. 6 in.=167.64 cm とあるので、決して小柄ではないのだが。
- (28) 「ジーンは警察バッジのせいでロマンスに恵まれない」(“Jean’s Police Badge Chases Romance Away”『デイリー・ミラー』1967 年 3 月 4 日号) 「Jean Purvis 20 歳…結婚したいなら、相手は警察の男か？」とある。
- (29) James Chuter-Ede (1882-1965) 「きれいな警察官をつくる」(“Making Fair Cops”『デイリー・ミラー』1945 年 9 月 20 日号) “fair cop” は女性警察官によく使われた呼称。また、1960 年に導入された交通巡視員については、“traffic dollies”、“petticoat patrol”、“glamour

- at the wheel” などやはり「女らしさ」を強調する呼称が使われる。
- (30) National Archives Currency Converterによると、1965年時点の£30は現在の£528.55、熟練工の21日分の給与に値する。
- (31) APニュース“Police Girls New Look” British Movietone, 18th September 1969. Associated Press Archive. [https://youtu.be/vCLVuPrfcLk?si=SzeV\\_FIXxtyfHcCb](https://youtu.be/vCLVuPrfcLk?si=SzeV_FIXxtyfHcCb) 帽子はやはり王室御用達のシモース・マーマン (Simone Mirman 1912-2008) のデザインと紹介されている。
- (32) “Sirens, scuffles ... and sexism” by Jennifer Rees, published 27 Jan. 2019. Mail Online. (<https://www.dailymail.co.uk/home/you/article-6618917/Sirens-scuffles-sexism-Female-police-officers-seen-all.html> 9/12/2023 閲覧)
- (33) 『ピクチャー・ポスト』1951年8月4日号の読者欄には、女性警察官の制服とハンドバッグをやや皮肉な調子で好ましいと訴える読者の手紙「彼女たちを女らしく」(“Keep Them Feminine”) が掲載されている。この投書では制服の下にフリルをつけたらどうか、と提案もしている。『デイリー・ミラー』では女性警察官に支給される黒いストッキングについて、以下の記事を掲載している。「女性警察官は支給されるストッキングに『ひどい』と」(“The women police thought their stockings ‘horrible’” 1948年6月23日号)、「女性警察官は現金ではなく、ストッキングを取るべき」(“Policewomen must take the stockings, not the cash” 1948年9月22日号)、「警察の女の子のボーナスは年に6足のタイツという切り詰め」(“Police Girls in a Tights Spot Get a Bonus of Six Pairs a Year” 1971年5月11日号)
- (34) 「スコットランドヤードは、女性にもバイクを取り入れることを試みる」(“Yard Tries Motorbike Women” 『デイリー・ミラー』1960年3月7日号)
- (35) 「警察の女の子が馬でお通り」(“The Police Girls Ride in” 『デイリー・ミラー』1970年6月17日号)
- (36) 「法的に認められた長い足」(“The Long Legs of the Law!” 『デイリー・ミラー』1977年12月7日号)
- (37) 「水玉模様の警察の女の子」(“Polka-dot police girls” 『デイリー・ミラー』1970年3月3日号) 水玉模様のブラウスの女性警察官の全身写真掲載。「警察の女の子の胸の谷間論争」(“Police Girls in Cleavage Row” 『デイリー・ミラー』1975年8月2日号) 女性警官の夏用ブラウスの胸元が開きすぎていることについて (写真なし)。
- (38) この求人広告は『デイリー・ミラー』1967年9月25日号、10月30日号、11月10日号、11月13日号、1968年1月9日号に掲載。イギリス運輸警察 (British Transport Police) も男女の顔写真を載せた求人広告を1968年6月5日号、1969年9月23日号に掲載しているが、女性に関しては既婚者の応募は受け付けない、とある。
- (39) 特筆すべきは、1968年にイギリスで初めて黒人女性が警察官に採用されたことである。ジャマイカ出身のシスリン・フェイ (Sislin Fay Allen 1938-2021) については以下の記事で触れられている。「シスリン、歴史を作る女の子」(“Sislin A Girl Helping to Make History” 『デイリー・ミラー』1968年2月16日号)、「二人のパイオニアが抱える問題」(“Problems of Two Pioneer Migrants” 1968年4月29日号)。後者の記事では、重職に就いた二人の移民が嫌がらせに遭っている、ということを伝えている。近年、警察においても黒人の歴史の再考が図られている。首都警察の試みについては以下のウェブサイトを参照。Metropolitan Police celebrates Black History Month (<https://www.met.police.uk/police-forces/metropolitan-police/areas/campaigns/black-history-month/>)
- (40) 近年、元女性警察官の告発により、男性同僚たちによるセクシュアル・ハラスメントが明



らかになっている。中でも新任女性警官が男性同僚の前で胸や下半身に警察署所有を示す印を押されるという「ステーション・スタンプ」という「通過儀礼」については複数の証言があり、広く行われていたと考えられる。上述の“Sirens, scuffles ... and sexism”及び、以下がある。

“Ex-policewoman: “They would lift up your skirt and use the office stamp on your buttocks” The Herald. 25th November 2017. (<https://www.heraldscotland.com/news/15683849.ex-policewoman-they-lift-skirt-use-office-stamp-buttocks/> 9/10/2023 閲覧)、 “100 years of women in the Metropolitan police: The challenges and changes: In February 1919, London’s first women police officers took to the streets of the city.” By Jane Warren. Express. Feb 4, 2019 (<https://www.express.co.uk/news/uk/1082440/100-years-women-metropolitan-police-london-wpcs> 9/10/2023 閲覧)、 “Male Officers Thought They Could Do Anything to Me” Daily Telegraph 22 May, 2016. <https://www.telegraph.co.uk/culture/tvandradio/11239908/Confessions-of-a-Copper-Channel-4.html> 9/10/2023 閲覧)

- (41) その他に前述の“Police Girls in a Tights Spot Get a Bonus of Six Pairs a Year” (1971年5月11日号)と“Police Girls in Cleavage Row” (『デイリー・ミラー』1975年8月2日号)が該当する。

#### 引用文献

- Brown, Jennifer, “European Policewomen: A Comparative Research Perspective,” *International Journal of the Sociology of Law* 25, no. 1 (1997): 1-19.
- Craik, Jennifer. *Uniforms Exposed: From Conformity to Transgression*. Berg, 2005.
- Doan, Laura. *Fashioning Sapphism: The Origins of Modern English Lesbian Culture*. Columbia UP, 2001.
- Gardiner, Juliet. *“Overpaid, Oversexed, & Over Here”: The American GI in World War II Britain*. Canopy Books, 1992.
- 林田敏子『イギリス近代警察の誕生: ヴィクトリア朝ポビーの社会史』昭和堂、2002年。
- 。「警察とジェンダー——20世紀イギリスにおける女性警察——」『歴史学研究』No. 860. 歴史学研究会編、青木書店、2009年11月号、26-35, 75.
- 。大日方純夫『警察』ミネルヴァ書房、2012年。
- 。『戦う女、戦えない女：第一次世界大戦期のジェンダーとセクシュアリティ』人文書院、2013年。
- Jackson, Louise A. “‘Lady Cops’ and ‘Decoy Doras’: Gender, Surveillance and the Construction of Urban Knowledge 1919-59” *London Journal*, 27: 1, 2002.
- 今野耿介『英国警察制度概説』原書房、2000年。
- Martin, Susan. E. “Policewomen and policemen: occupational role dilemmas and choices of female officers.” *Journal of Police Science and Administration* 2, 1979, 314-23.
- . “Breaking and Entering”: Policewomen on Patrol. Berkeley: University of California Press, 1980.
- Lock, Joan. *The British Policewoman*. (1979) Hale, 2014.
- Mawby, R. I. *Policing Across the World: Issues for the Twenty-first Century*. Routledge, 1999.
- 内藤弘『スコットランド・ヤード物語』晶文社、1996年。
- Rabe-Hemp, Cara; Garcia, Venessa. *Women Policing across the Globe* (p. 6). Rowman & Littlefield

Publishers, 2019. Kindle 版.

Rees, Jennifer; Strange, Robert J. *Voices from the Blue: The Real Lives of Policewomen*. Robinson, 2019.

杉村使乃『制服ガールの総力戦』春風社、2021年。

吉川経夫編『各国警察制度の再編』法政大学出版局、1995年。